

# 農家人口減少が稲作生産に与える影響の分析 —農家人口と米の需給の将来推計—

---

上野 大輔

## 【要 旨】

本論文の目的は、農家人口の減少が稲作生産に及ぼす影響を分析することであった。その主な分析結果は次の4点である。

- ① コーホート変化率法による農家人口の将来推計の結果、2040年の農家人口は15年比で80%減少する。
- ② これまでに減少した農家と農業算出額の要因分析の結果、農家の減少の約83%、生産額の減少の約80%が稲作農家の減少によるものであり、更にその大部分が小規模の農家の減少によるものである。
- ③ 米の需給の将来推計を行ない、40年では稲作農家人口は15年比8割減となるが、大規模農家に生産が集中すれば、40年でも米の供給量は需要量の99%を満たせる。
- ④ ただし、18の都府県では生産量が15年比で6割以上減少し、全国の耕作放棄地は現在の2.2倍になると予測され、影響の地域差が大きい。水田が持つ多面的な機能を考えると、今後は経営規模や生産性によらずに水田を維持する方策の検討が必要となるだろう。

## 【講 評】

本論文は、時に喧伝される農業就業人口の減少の問題に関し、それを農業生産量の議論に直結する見方を批判的に検証している。具体的には、コーホート変化率法による農家人口の将来推計、農林水産省「農林業センサス」のデータの分析等をもとに、農業就業人口の減少が必ずしも農業生産の問題に直結せず、将来の米の国内自給に影響がないことを論じている。

統計・データに基づく実証性の高さが本論文の特徴だが、その真価はむしろ反証の多角性にあるとも考えられる。何より、通俗的なイメージないし別の意図が透けて見えるような言説を、実証的かつ論理的に覆している点において本論文は評価できると言え、そこに社会的な意義を認めることもできる。